

令和元年度 第2回千歳市公立大学法人評価委員会 議事要旨

1 日時 令和元年7月4日(木) 14時から15時半まで

2 場所 千歳市役所議会棟第2委員会室

3 出席者

【委員】 委員長 佐伯 浩
委員 小川 恭孝
委員 福村 景範
委員 櫻井 隆
委員 千葉 崇晶

【千歳市】 企画部 佐々木部長
企画部公立大学政策課 松崎課長 前田係長 中川係長

4 傍聴者 1名

5 会議次第

- ・開会
- ・議題
 - (1) 報告第1号 令和元年度事業計画及び予算
 - (2) 議案第1号 業務実績評価方針(素案)
 - (3) 議案第2号 年度評価実施要領(素案)
 - (4) その他
- ・閉会

6 会議の概要

(1) 結果概要

公立大学法人公立千歳科学技術大学(以下「科技大」という。)の令和元年度事業計画及び予算について報告を行い、また、来年度以降評価委員会において実施する科技大の業務実績評価について、評価方針(素案)と年度評価の実施要領(素案)の審議を行った。

なお、評価方針及び年度評価実施要領については、次回評価委員会において決定することとし、修正意見等ある委員については、次回評価委員会までに事務局に連絡をすることとした。

(2) 議事概要

議題(1) 報告第1号 令和元年度事業計画及び予算

科技大の令和元年度事業計画及び予算について事務局が説明を行った。主な質疑応答は次のとおり。

(※以下の質疑応答に出てくる資料のページ数は、「資料1 令和元年度事業計画及び予算」のページ数である。)

【委員 A】 1 ページ目の「2 教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための措置」(1)アに「AO入試」とあるが、広く一般に公開されることから、日本語表記とするなど、分かりやすい表現にした方が良いのではないか

【事務局】 アドミッションズ・オフィス入試のことであり、一般に、大学入試ではこの表現が定着しており、日本語での表記方法はないかと思う。

【委員 A】 了解した。

【委員 A】 11 ページ、「グループワークを取り入れた授業科目」とあるが、この「グループワーク」についても、括弧書きで説明を入れるなどした方が分かりやすいのではないか。

【事務局】 次年度以降、分かりやすい表現にするよう、大学と協議をしていきたい。

【委員 A】 7 ページ、「5 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための措置」の指標が、「FD・SD合同研修会を1回以上開催する」となっているが、具体的な内容、例えば、改善を何件実施するなど、質的なものに触れた方が良いのではないか。会議の開催はあくまで手段である。

【事務局】 ご意見があったことを大学に伝えていきたい。

【委員 B】 FD、SDへの出席は義務付けられているのか。出たい人間だけが出るという事になると改善に結びつかないと思うが。

【事務局】 大学からは義務付けていると聞いている。必ずしも100%になるという事はないようだが、かなり高い出席率だと聞いている。

【委員 A】 10 ページ、「(2) 安全衛生及び危機管理に関する目標を達成するための措置」の指標が、研修会や訓練の実施回数となっているが、企業の場合であれば、「災害はゼロ」、「火災はゼロ」という数値目標を掲げている。大学で今までそのような災害がないのであれば、引き続き「ゼロ」という数字を掲げても良いのではないか。避難訓練を実施して、災害をゼロにする、という指標の方が良いのではないか。最終目標は、「災害ゼロ」、「怪我ゼロ」、「火災ゼロ」という事であり、訓練はそのための手段である。それをやって、これが最終目標である、という事を明記した方が良く考える。

【事務局】 大学の方に来年度の作成にあたり、そのような意見があったことを伝える。

【委員 C】 最近多いのは地震の災害かと思うが、「地震ゼロ」というのは難しい。

【委員 D】 学校運営におけるリスクとは何か、という話になるのかと思うが、企業の場合はリスクを洗い出したリスク管理シートのようなものがある。専門的な機器について危険があるなどを含めたリスクアセスメントの実施が大事だと考える。

【委員 C】 意外に大学で危ないのは、学生のお酒の飲みすぎである。アルコールの飲み過ぎで、吐瀉物を気管に詰まらせて死亡するという事例がある。

【委員 B】 1 ページ「(1) 学生の受入れに関する目標を達成するための措置」に推薦入試とあるが、千歳の公立大学で地域のための枠を設けるといのは分かるが、国からの税金も入ることから、地域枠をどの程度にするのか、ということをきちんと説明できるようにしておくことが大事である。AO入試の妥当性、決定のプロセスなどを、明確にしなければならない。AO入試などは、専門外の先生や事務職員も入れるなど、透明性を高めることが大切である。

また、留学生に関することも書かれているが、日本の学生は卒業できればいい、というスタンスの学生が多いが、海外の学生は、一番でもいい成績で卒業したいと考えている。日本の大学の先生には、生徒全員に「優」を付けるなど、留学生のやる気を削ぐような成績を付ける人がいる。成績の付け方についてはきちんと学生に説明しなければならない。北大では、工学部は11段階評価になっている。教養は「秀・優・良・可・不可」の5段階評価だが、「秀・優・良・可」の割合は決められている。これまでの調査によって、学生が10人以上受講している授業については、絶対評価ではなく相対評価で問題ないという結論が出ている。成績評価を厳密にしないと、留学生や学びたいという学生を失望させることになるので、気を付けていただきたい。

【委員 E】 7ページから8ページにかけて、「(3) 人事制度と人材育成に関する目標を達成するための措置」で、人事評価制度については、これまでの人事評価制度を踏まえて実施していくなかで、修正していくという流れになるかと思うが、公立化して当然これまでの大学とは異なる役割が求められると思う。地域貢献や、市の政策に大学の知見を生かすなど、公立化したことによって新しく評価される基準が出てくると思うので、これから新しく評価制度を作っていく上でそういったところも反映させていただければと思う。

【事務局】 大学に意見があったことを伝える。

【委員 B】 先ほどの事務職員のSDとも絡むが、留学生を増やすという目標を掲げていたと思うが、先生は当然だが、事務職員にも、ある程度英会話ができてコミュニケーションが取れる職員がいないと、学生も何かあった時に困る。SDの中にでも、外国語のコミュニケーション能力を向上させる取組を入れてはいかがか。そういうプロを養成しないと、真の留学生教育、或いは安心して留学生が科技大に来ることができない。

もう一つは、入試にも絡む問題だが、願書が出た段階で、先生や事務職員が先方の大学と連絡を取り、事前にその学生の能力や、どのような学生であるかをあらかじめ把握しておく、折角日本に試験を受けに来たのに落ちてしまった、という事を防ぐことができる。そのためにも、時間がかかるかもしれないが、外国語のコミュニケーション能力のある人材を育てていくことが必要である。

議題(2) 議案第1号 業務実績評価方針(素案)

業務実績評価方針(素案)について事務局が説明し、評価委員会において審議を行った。

【委員 A】 評価にあたっては、大学から提出される報告に基づいて行うということだが、ヒアリングや現場の点検なども含めて行うのか。

【事務局】 報告書の内容については、大学が直接説明することを予定している。

【委員 B】 国立大学の場合は、直接その大学に行って、4時間くらいかけてヒアリング等を行って

いる。

【委員 A】この評価委員会も、報告を受けて、必要に応じて現場でヒアリングを行った方が良い。尚且つ、文章だけではなく、見えるものを実績で見せていただくという形が良いのではないか。

【事務局】貴重なご意見なので、大学で評価ができないか検討したい。

【委員 B】最近ハラスメントが問題になっている。北大でも相談員を配置しているが、相談者は自分がそういう相談をしていることを周囲に知られたくないことから、自分から最も遠い組織の相談員に相談をするケースが多い。そういうことを考えると、科技大でも、学内の先生、事務局職員だけでなく、学外の方、例えば弁護士などが相談員となっていると、相談者が相談しやすく、実態が早く分かる、という事になるのではないか。そういう配慮をされた方が良いかと思う。

【事務局】分かりました。

【委員 E】学内にもガバナンスがあると思うが、理事会や監事など、それらの学内のガバナンスと、我々評価委員との連携、又は役割分担というのは、どのように考えたらよろしいのか。

【事務局】評価委員会は、学外からのチェック機能という事で置いている第三者機関である。学内のガバナンスである理事会などとの連携というのではないかもしれない。

【委員 E】監事も外から見る役割なのではないかと思うが、それとはまた別の視点で見るという事か。

【事務局】そうである。

議題（3）議案第2号 年度評価実施要領（素案）

年度評価実施要領（素案）について事務局が説明し、評価委員会において審議を行った。

【委員 A】大学は年度毎の評価を出してくるということだが、我々は中期に、中期目標に対して合っているかどうかを評価するという事でよろしいか。

【事務局】評価委員会も毎年評価を行うことになる。中期目標が6年スパンのものであるため、その目標達成のために、昨年行った事業内容が適正であるかどうか、という視点で評価する。なお、4年目終了時評価は、次の中期目標を作成するという観点から、目標期間の途中で評価を行う中間評価の位置付けである。

【委員 A】例えば来年評価するときは、今年度実施したことを評価する。その時には、中期計画の達成に向けて、ちゃんとステップを踏んでいるか、ということの評価するという事でよろしいか。

【事務局】そのとおりである。中期計画の6分の1、ということになる。

【委員 E】目標期間は6年間なので、当然一年目で全て達成できるわけではない。達成できるものもあれば、6年間で段階を追って、ここまで、というのが当然あると思うが、それが全く見えないので、正直どうやって評価するのか分からない。

【事務局】6年間での到達点というのは、資料3-③でいきますと、例えば1ページ目の指標の入学定員割合の表を見ていただくと、毎年この表を埋めていくことで、目標達成に近づいているのかどうか、見えてくるのではないかと考えている。

【委員 E】積み重ねていけば、最後にどうだったか、というのは分かると思うが、評価する観点としてはどうなのかと。

【事務局】前回もお話をいただいた、ロードマップのお話になるかと思うが。

【委員 E】そうそう、ロードマップ。

【委員 B】サバティカル制度や留学生について記載されているが、6年後に国際化に対応できる組織になることを目指すのであれば、人材育成など、全体の中で早めにやっておかなければならないことを最初の年に入れておかなければいけない。また、サバティカル制度を利用して海外大学で研究を行う場合や、学生が留学する際の授業料などは、交流協定のようなものを締結すれば免除される。それらの国際化に係る準備は早めにやっておかないと大変かもしれない。

4年目位になって、これでは目標達成に間に合わないのではないか、という事にならないように、そのような視点で、書かれている内容を確認した方が良いかと思う。

【事務局】捕捉させていただくと、大学がこの自己評価結果を提出する際、大学に説明してもらうので、その時に、中期計画の達成には届かないのではないか、などのディスカッションをする機会はあるかと思う。それを踏まえて、評価委員会ではこれを促進させた方が良いのではないかなど、そういう判断がこれからの業務になっていく。

【委員長】ほかによろしいでしょうか。ほか意見がないという事であれば、これまでに出了意見を事務局でまとめて、次回再度審議するという事になりますが、よろしいでしょうか。

【委員各位】はい。

議題（4）その他

事務局より、次回の評価委員会の9月6日開催予定とする旨、また、本日の議案について次回の評価委員会において最終案を示し、決定したいことから、意見等がある場合には事務局に連絡をいただくことで了承を得た。